

序章 日本の心・言葉・文字

昭和六十一年四月九日、東京のホテル・オークラで開催された、第十九回原子力産業会議における午餐会で、出席の世界各国の原子力関係省庁の大臣・次官、原子力産業に従事してゐる学者・実業家たち四百名に対して、私は「日本の心・言葉・文字」といふ特別講演を行ふ光栄に浴した。

講演の依頼は早くにあったので、数か月にわたり、いくつかの原稿を作った。あれこれと迷ったが、外国の方々が多いのだから、日本人の心を、日本の言葉や文字を通して解り易く説明することにしようと考え、標題を「日本の心・言葉・文字」とすることに決めた。

原稿を送ると、翻訳担当者から「“心”をどう翻訳しますか」と尋ねられ、改めて、
「heartかな、soulかな、それともspiritかな、mindもあるが」といふことで、迷ってしまっ
た。

私のやうに英語に未熟な者が、いくら考へたところで、解決が着くわけがないので、
「原稿を全部お読み頂いて、最もふさはしいと思はれる言葉に翻訳して下さい。お任せ
します」と翻訳者に一任してしました。

あとで英文の標題を見たら、「Soul, Words and Letters of Japan」となつてみた。英語
に堪能な友人にこの話をしたら、「英語にいくら精通してみても、かういふ翻訳は難
しいよ」と言つた。

さて、講演後、中国の原子力工業大臣、蔣心雄氏が私の席まで来られて、「漢字の
話はとても興味深かつた」といふ感想と感謝の意を述べて下さつたので私は嬉しく思ひ

と同時にほつとした。

その講演内容は次の通りである。

*

*

*

私は、約半世紀に亙り、日本の言葉や文字に就て研究して参つた者でございます。

それで、その立場から、日本人の物の観方みかたや考へ方をお話申し上げようと存じます。

日本語に“有情”うじやうといふ言葉があります。この言葉は、情、つまり“心有る物”といふ
意味の言葉ですが、これは人間だけでなく、鳥や虫、更には梅や桜のやうな植物まで
を含めた呼び名であります。

数年前、イギリスの“Nature”ネイチャーといふ科学誌に角田忠信氏の「日本人の脳」といふ論文

が掲載され、世界の話題になりました。今までは鳥の声・虫の音は、凡て人間の右の脳で処理される、と考へられておりました。所が、日本人に限って、これを左の脳で処理してゐる、といふのです。

然し、これは、日本人の脳が生れつきさうなつてゐるのではなくて、日本語を日常語として使つてゐる日本人に限られる、といふのです。つまり、全く純粹の日本人でも、外国で生れ育ち、その国の言葉を日常語として使つてゐる日本人の脳は、その国の人の脳と同じ様に、鳥の声・虫の音を右の脳で聴いてゐる、といふのです。

従つて、この脳の仕組の違ひは、生れつきの物ではなくて、“後天的に”作られた物であり、それは日本語の性質、角田教授の言に依りますと、「母韻が他国語に比べて著しく多い」といふ性質に因る、といふ事であります。

然し、私は、それよりも、この日本といふ穏やかな風土の中で暮してゐるうちに、

自然と養はれた心情に原因がある、と思つてゐます。例へば、日本人なら誰でも、鈴虫や松虫、コホロギ、キリギリスなど、その虫の名は元より、その鳴き音もよく知つてゐますが、外国の方々はこのような物に関心が無く、従つて、虫の名前も学術語としてあるだけで、生活用語としては無い、と伺つて居ります。

所が、日本人は、これらの虫の名前や鳴き音を知つてゐるばかりではなく、これらの虫の音を、私たちに語り掛ける、意味をもつた言葉として受取つてゐるのであります。それも恋人の語り掛ける言葉の様に、これをいとほしんで、うっとりとして聴きほれるのであります。

私は子供の頃、晩秋の夜更けに鳴く虫の音を「つづれ刺せ、つづれ刺せ」と人間に語り掛けてゐるのだ、と母親から聞かされました。それで、今でもその様な言葉としてこれを聴いて居ります。又、鶏の鳴き声は「夜が明けた」といふ言葉として聴いてゐます。

し、鶯の鳴き声は「法、法、華経」といふ有難いお経の名前を表した言葉としてこれを聴いて居ります。ですから、この様な鳥の声や虫の音を、人間の言葉と同じ様に左の脳で聴くといふ事は、私は当然の事と思ふ訳であります。

然しながら、日本人は、鳥や虫だけを自分の仲間と考へてみるではありません。

梅や桜の木のやうな植物も、自分の仲間と見てゐるのです。花が咲くの“咲”といふ字は、中国で作られた字で、中国では「人が口を開けて笑ふ」といふ意味の字です。所が、日本人はこの字を「花が咲く」といふ意味に用ひてゐるのです。これは明らかに「花が我々に笑ひ掛けてゐる」と見、花を友達と考へてゐるからだと思ひます。

ですから、日本人は、桜の花の咲く頃ともなりますと、その日を今や遅しと待ちかねて、酒や食へ物を携へて桜の木の下に訪れ、花と共に春のひと時を楽しむのです。

日本の田舎には、たいてい村の真中に、鬱蒼と茂る森に囲まれて、鎮守の神様を祭る社があります。田舎で育つた私は、誰もがさうであつた様に、その中で遊び回つて成長致しました。その為、田舎に帰りますと、何よりもこの社の森が懐かしく、ここを訪れずにはゐられません。彼らは、昔と全く同じ姿で私を迎へてくれます。それは、今は亡き父母や祖父母の様に暖かく感じられ、且又、非常に偉大な人物の様に厳かにも思はれるのです。

さて、木は生き物ですが、私たちは生命の無い物をも友達と見、語り掛ける事を

致します。十三世紀の初め、明恵みやうゑといふ坊さんの歌に「雲を出でて我に伴ふ冬の月、風

や身に渗む、雪や冷たき」[winter moon, coming from the clouds to keep me company, Is

the wind piercing, the snow cold?]とこの歌があります。冬の夜道を歩いて行きますと、

雲間から月が現れ私のあとをつけて来ます。お蔭で足元は明るく、淋しさも紛れま
す。お月様、有難う。それにしてもお月様、この冬の夜風が身に滲みませんか。又、こ
の雪が冷たくはありませんか。お月様、風邪を引かないで下さい……と、かういふ意
味の歌です。そして、これが典型的な日本人の心なのです。生命の無い物に対しても、
親しみの心をもって語り掛ける、これが伝統的な日本の心なのです。

この様な日本の心は、この恵まれた自然の中から生れ、育つたものだと思ひます。そ
の事は、欧米の皆様がよく口にされる「自然を克服する」といふ言葉と、私どもが口に
する「自然の懐ふところに抱かれる」といふ言葉とを比較してみれば、よくお解り頂けると思
ひます。

日本人にとっては、自然は私たちを暖かく抱擁してくれる親の様な存在でありま
す。事実、日本のある偉大な思想家は「自然こそ、我々の真の親である。我々は両親の
肉体を借りて生れたのであって、ほんとは、自然の力が両親に働いて、それで我といふ
一つの生命が母親の胎内に宿り、この世に誕生したのである。我を作ってくれた真の親
は自然であつて、それは人間の出来る業ではない。我々は自然のお蔭でこの世を生き、
仕事を果す事が出来て、やがて元の自然に帰って行くのである」と説いて居ります。
ですから、人間も他の動物や植物と全く同じ様に、自然から生れ、自然に帰って行
く存在であつて、言はば人間も動物も植物も皆兄弟である、といふのが伝統的な日本
の心なのであります。

日本の言葉は、この様な自然の中から生れ、そして発達して参りました。欧米の皆
様には凡て同じ様に見える虫を、鈴虫や松虫、コホロギ、キリギリスなどと区別して

見る事も、日本といふ優しい自然なればこそと思ひます。そして、鈴虫や松虫などの言葉が、虫の音に耳を煩ける優しい日本の心を養ひ育て、それが虫の音を左の脳で聴く日本人の脳を作るのだと思ひます。

私たちは、物事を考へる場合は勿論、物を観る場合でも、実は言葉に扱つて観てゐるのであります。言葉を通して観て、初めてそれが意識され、大脳に記憶されるのであります。ですから、同じ牛や鶏を観ても、言葉の異なる日本人と欧米人とは、その観方が自然と異らざるを得ません。

日本人は、“牛・鶏”といふ性の無い言葉でこれらを観ますから、全く雌か雄かを意識しないで観ますが、欧米人は cow か bull か ox か、hen か rooster か、といふ様に、性を伴つた言葉でこれを観ますから、いやでも雌か雄かを意識せざるを得ません。

この様に、言葉は物の観方や考へ方を規定しますので、角田教授が発見しました様に、言葉が人間の脳の構造に变化を及ぼす程の力をもつてゐるのだと思ひます。

さういふ訳で、言葉が豊かですと、心も自然に豊かになり、言葉が貧しいと心も貧しくなります。ですから、私たちは、美しく優しい心を養ひ育てる為、美しく優しい言葉を豊かに使ふ努力をする必要がある訳です。

所で、日本語の主要な語句は、この会の名称“原子力産業会議”といふ言葉がさうでありますやうに、漢字を土台にして組立てられてゐます。

この漢字は、世界で最も内容の豊かな素晴らしし文字でありまして、漢字を組合せますとどんなに複雑な思想や内容でも、実に適確に表現できる利点を備へてゐます。唯、字形が複雑で、且字数が多いといふ事で、学習が困難であるとされ、低い評価を受けてゐます。

所が、字形の複雑さや字数の多い事は決して学習困難の原因ではないこと、又、漢字を最も容易に習得する時期は就学前の幼児期にあって、この時期に学習させない事が漢字学習を困難にさせてゐる事を、私は発見致しました。

わが国の学校教育では、アルファベットに当るカナ文字を初めに学習させ、その後、漢字の学習に移るのですが、これが大変な間違ひなのであります。

試みに、全く文字を知らない二、三歳の幼児に、“鳩・鳥・九・く”といふ四つの文字を教へてみて下さい。最も容易に、最も早く覚える文字は、最も難しいとされてゐる

“鳩”です。誰もが最も易しいと思ふ“く”は、実は最も覚え難く、“鳩”を覚える十倍の時間を費しても覚えられないのが普通です。

二、三歳の幼児でカナが覚えられる子は極めて稀ですが、“鳩”が覚えられない子はまづおません。それも、驚く程簡単に覚えてしまひます。これは、私が数百園の幼稚

園の数十万人の幼児に実験してもらつて突き留めた事実です。

そもそも記憶を成立させる第一の要件は、“関心”です。もう一つは“反復”ですが、それは“関心”があつての上の事です。全く関心の無い事をどんなに反復しても、記憶は出来ません。幼児がカナを覚ええないのは、それが幼児には全く魅力が無いからです。

又、“鳩”や“蟻”などの複雑な字形の漢字を幼児が容易に覚える訳は、それが幼児の関心を惹く内容をもつてゐるからですが、もう一つ、複雑な文字の方が記憶の手掛りが多いので覚え易く、覚えたら忘れ難いのです。

それは人の顔を覚えるのと同じ事です。複雑な顔をした人ほど覚え易いでせう。然も、さういふ顔の人は決して忘れないで、いつどこであつても直に思ひ出す事が出来ます。それに引き替へ、単純な顔ほど覚え難く、覚えても忘れ易いものです。

この事は、欧米におけるアルファベットの学習に就ても言へる事です。アルファベットをまづ学習させ、それから word の学習に移つてみますが、これは間違ひと言はなければなりません。

“m”は覚えられなくても“mommy”や“mouth”の覚えられない子はみません。だから、mommy や mouth をまづ学習させる事が先決です。mommy や mouth が読めるやうになれば自然と“目”に関心をもつ様になります。その時、“目”を教へれば、今度は容易に覚えられます。

実は、この教育法は、How to teach your baby to read の著者グレン・ドーマン博士が、二十年前前から主張してゐるものです。然し、実践してみれば直に判るこの教育法が、世の常識になじまない為に実験されず、相変わらずアルファベットから学習する方法が続けられてゐます。

文字の学習は、カナやアルファベットから始める為に難しいのであつて、漢字や word から始めれば、零歳児でも覚えられるものです。この事は、私もドーマン博士も、二十年前前に実証してゐます。皆さんに信じて頂けないと思ひますが、「文字は、本質的には、言葉よりも覚え易い」ものです。

もし、生後八か月から十か月の、まだ言葉の覚えられない赤ちゃんに、“目・口・鼻・耳・手”などの漢字を、言葉と一緒にその“物”と対照させて教へますと、言葉よりも先に文字を覚えて、物と対照させる事が出来るやうになります。

例へば、“目”といふ漢字カードを赤ちゃんに見せますと、赤ちゃんはそれを見て自分の目を指さします。“耳”といふ漢字カードを見せれば、自分の耳を指さします。(ホーツといふ嘆声方々より起る)

漢字が言葉よりも覚え易い事を証明する事実は何にもあります。言葉の覚えら

れない重度の精薄児に、零歳児と同じ方法で漢字カードと物とを対照させて教へますと、言葉は覚えられませんが、漢字は覚えてカードと物とを正しく結び付けます。そして、かういふ学習を続けてみますと、言葉が言へるやうになります。

今、この様な実験を、多くの方々に協力して頂いてやってみますが、面白い事に、零歳の赤ちゃんでも漢字カードを覗く事を楽しんでゐる、と誰もが認めてゐます。機嫌の悪い時、泣いてゐる時でも。漢字カードを見せて読んでやりますと、途端に泣き止み、機嫌が良くなる、といふ事です。(笑声)ですから、人間は文字を読む事が楽しいやうに、遺伝子にプログラムされてゐるのではないか、とさへ私は思つてゐます。

さて、私の発見した教育法と、ドーマン博士が発見した教育法とは、原理が同じなので、これを“石井・ドーマン教育法”と呼ぶ事を博士に提案し、お互ひにこの教育法の普及に努力する事を約束しました。然し、実験すれば直に判るこの教育法も、世の中の人々は仲々実践してくれません。それは、頭で考へた所ではとても信じ難いものがあるからです。

凡そ、未経験の物事に対しては、人は皆、臆病なものです。経験者から見れば何でもない事でも、それを経験しない者にとっては、恐ろしい事で、敬遠するのが人情です。原子力の場合でも、未知なるが故に人々は恐れ、敬遠する訳です。

ただ、原子力は人間に不可欠のエネルギーに関はる重要な問題ですから、人々はいやでも関心を持たざるを得ません。ですから、私どもの教育問題よりも、きっと早く人々の理解が得られる事と思ひます。さういふ日の一日も早からん事をお祈りして、私の拙いお話を終りたいと思ひます。御清聴を感謝申し上げます。(拍手)